

心とからだ

養老孟司

今日は、実は私一人ではなく、三人で参つております。脳を二人分、持つてきました。脳に興味のある方、ない方があります。また、まあこんな風なものだと、おわかりいただ

くよう、皆さまにおまわし下さい。持つて帰つていただきてもかまいませんが、人間のものですので…。縦と横に切つたものです。

なぜこれをお持ちしたかと言いますと、多くの方が脳に実感がありません。みなさんがそれが、脳を一つお持ちですが、おそらく脳を持つているという感じがないと思います。なぜなら脳は痛くないからです。頭痛とは、脳が痛むのではなく、脳のまわりにあるもの、たとえば血管や、硬膜という脳を包む膜が痛んでいるのです。脳そのものは一向に痛くも痒くもありません。ですから、局所麻酔をした看者さんの頭の骨を外して硬膜を切つて、脳を露出して、その脳をいじつても御本人は何も感じません。そういうものです。です

から、自分の頭の中に脳が入っていることが意識されません。ところが、この脳がじつにいろんなことをやっておりま

す。

私は、長い間、解剖という作業をしてましたが、解剖もまた皆さんとの日常とは関係のないことです。解剖する相手は亡くなつた方ですが、私は三十年以上この仕事をしているので、いろいろなことを考えさせられます。解剖している私がいまして、対象として亡くなつた人がいますが、その違いは何か。私は生きているけど、相手は死んでいると、皆さんは簡単にそうおっしゃるかと思います。それは、日本の場合、生きている人と死んでいる人の間に大変深い溝を掘るからです。

御存知のように、死という深い溝のこっち側に、「脳死」というのが最近出てきまして、これをどうするのかという議論が進んでいます。しかし、私が日常的に見ていました亡く

なつた方、これが何かを、日本では議論することがまずありません。その大きな理由は、生と死の間に深い溝を掘るからです。

この溝は、実は文化的に作られたものです。それは、私たちのような職業を長い間していれば、良くわかることです。たとえば、先輩や先生が病気になれば、お見舞に行きます。

親しい方ですと毎日お見舞に行きまして、そしてある日亡くなりますが、最後にお見舞に行くのが、告別式です。その告別式で何があるか。帰りに入口の所に黒い服を着た人が、4、5人立っています。帰ろうとすると袋をくれます。これが非常に不思議なもので、袋に塩が入っているわけです。そして一応塩をまいて家に入ることになります。私の仕事ですと、年がら年中、塩をまいていなくてはいけません。水戸泉じやないけど、かなり激しく塩をまかなくてはいけないということになります。

私が世界共通かというと、そうではありません。「脳死問題」は、実はこの深い溝に関係しています。その溝を動かせというと、多くの方が周章狼狽します。では、生死の境をどう考えるかというと、生きている状態から死んでいる状態への移行は、漸次移行するのであって、どこにも溝なんかありません。ところが日本では生死の間に、非常にはつきり線を引きます。

私どものこの線の引き方がいかにしつかりしたものであるかは、御存知の通りで、これは動かせない程度であります。

こういう仕事をやっていくと、あれは一体、何だからと、かなり不思議になります。そこにみごとに表現されていますのが、今申し上げた生死の間の深い溝です。それを示すのが、死者をちょっと訪問して帰りますと、塩をまかなくてはならない、という感覚です。日本人は、これを案外意識していないという気がします。死者と生者がいかに違うと思われているかは、死んだら名前が変わることからわかるわけで、

例えば、テレビドラマの殺人事件を見ると、刑事が出て来て被害者をさして「あのホトケが…」と言っています。つまり死者は名前が変わります。また死に方によつて、たとえば川に溺れてあがつてくると、「土左衛門」に変わる。名前が変わります。これも生死をきつく分けてしまう、我々の感性を表しているわけです。

和風の家に行くと、障子や襖があります。障子みたいな仕切りは、仕切りではありません。ドイツ人に言わせれば、仕切りではないので、あんなものはすぐに通れる。だから連中

はしつかりした壁を作つて、ドアを作つて、錠かけて閉めなくては、プライバシーなんか守れないと考えています。日本人は障子を閉じてすましております。ですから、子どもが障子紙にツバをつけて、穴を開けてのぞきます。それは、非常に変なことなのです。なぜかと言つたら、あんなチヨロイものは、ちょっとすき間を開けて覗けばいいわけです。それを開けないで穴から覗くというのは、開けちゃいかん、というのが大前提なのです。つまり我々の文化の中では深く、心の中で仕切りを作つています。これが、日本人の好んでいう言葉では、「けじめ」というものにつながつていて、ここでピッと切つてしまふ。

じやあ、生きている人と死んでる人がピッと切れるかというと、実は切れないというのはわかりきった話です。現在の社会制度、例えば腎移植であれば、死後移植も可能です。これは、腎臓は死後も生きている、という奇妙な話になるわけです。これは腎臓に限りません。皮膚の移植を本当にしようと思えば、次の日だって、いいわけです。私は大学院生の時に、皮膚の研究をしておりまして、何をやつてたかといふと、皮膚をガラスの中で飼う培養というのをやっていました。栄養液を入れ、金網で台を作り、その上に皮膚をのつけて飼うと、ちゃんと飼えるのです。もちろん温めておきます。どこからヒフを探るのかと言えば、ヒヨコです。卵を温めま

して、中に入っているヒヨコから皮膚を探つて育てるのです。そうすると親の皮膚にだんだん変つていきます。こういうことを医学部でやつていますと、人間じやどうなりますか、という質問を必ず受けますので、ヒトの皮膚を調べたいわけです。しようがないから、自分のを剥ぎます。カミソリで腕の内側をピッと剥ぎますと、ちょっと痛いですが、辛抱します。大きいと酸素が真中までいきませんから、それを小さく切つて、金網にのせますとちゃんと生きています。だけども、この切り採つた皮膚から余りが出来ます。他人のだと捨てますが、自分のだともつたいない。これはどうするかというと、別の容器に入れまして、ちょっと栄養液を入れ、フタをして冷蔵庫に入れます。次の日に出してきて使つても、ちゃんと使えます。ですから、亡くなつたおじいちゃんのヒゲをそつてあげたのに、次の日見たらヒゲが伸びているということがあります。ヒゲなんか伸びたって、ちつとも不思議はないのです。

どうしてこういう時に不思議に思うかというと、医者が出てきて、「御臨終です」といつたから、死んだはずだと思った。栄養液を入れ、金網で台を作り、その上に皮膚をのつけて飼うと、ちゃんと飼えるのです。もちろん温めておきます。の不思議もないわけです。皮膚なら全体を冷蔵庫に入れてお

けば、次の日に剝いで使えるのです。火傷した人がいれば、それを剝いで、はってあげてもいいのです。勿論、免疫がありますから、すぐ剝れてしまいますが、とりあえずのカバーにはなります。

「死の瞬間」をきちっと決めてしまう理由は、他にもあります。それは社会的な理由、つまり「法律」です。

法律では、私たち医者は、死亡診断書を書かなくてはなりません。そこには、死亡時刻という欄があります。死亡時刻が法律で決まっているから、医者はしようがなく書くのです。すると、その時に死んだことになるわけです。どうして死亡時刻を決めるかと言うと、生あって死がある以上、「境」があるはずだ、という考えです。この考えが、どこから来かるというと、言葉の世界からです。言葉の世界は、このように「境」をつけるものです。

皆さんの体は、もともとたった一つのものですが、それに頭とか足とか胴体とか、名前をつけますと、本来一つだった体が切れてしまします。頭と胴体の境が、できてしまします。しようがないから、そこに首という名前をつけますが、では首と頭の境はどこだと聞くと、たいていの人はわからないう。どつから首で、どつから胴体だといつても、わかりません。本来は一つですから、これは定義しても無駄です。つまり頭の中で切れているのであって、それが言葉の性質です。

こういうことを考えると、非常に良くわかるのが、解剖がじつはどこから始ったかということです。つまり、人間の体を言葉にしようとしますと、まず先に頭の中で、人間の体がバラバラになるのです。人間は頭の中で行ったことを、外の世界で実現してゆく動物です。空を飛ぼうと思えば、やがて飛行機を作り出す。

頭の中で、言葉を使って、体をバラバラにしますから、次に実際に体をバラバラにするということを始めます。それが解剖学の始まりで、したがって解剖学では言葉を非常に重視するのです。では法律学とは何かといいますと、まさに言葉の世界です。ですから法律の大前提は言葉の性質です。そうすると言葉が物を切るというのは、当然のこととして法律の中で受けとられます。従つて、生と死があれば、死亡時刻があるはずとなりますので、そこに死亡時刻を持込むのであって、そこで人間の生きている状態と死んでいる状態が切れてしまします。

中世の人は、そんなことを考えていなかつたということは、実は今日、スライドをお持ちしているので、時間があればお見せしたいと思います。中世というのは、鎌倉時代から戦国時代までですが、日本人は以上のようなことは考えていました。なかつたと思いません。これは江戸以降に、私どもの文化が作ってきた非常に堅い仕切りだと思います。

よその国ではどう考へてゐるかを、ちよつと申し上げます。ヨーロッパに旅行されたら、どういう町でもいいから、ぜひ一度墓地を訪れていただきたい。小さな町に行つても、私はまずお墓に行きます。墓を見るとその町がよくわかります。多くの町には、墓が三種類あります。それは、カトリック、プロテstant、ユダヤ人の墓地です。全部が一緒になつてゐる所は、さらにおもしろいのです。パリですとペール・ラシェーズという有名な墓地があります。

ここは丘になつていまして、遠くから見ると日本の普通の山に見えます。まさに青山です。しかし、近くに行きますと墓地だとわかります。この中を散歩をすると、有名な人の墓があるので、ずいぶん時間がつぶせます。この墓地の一一番低いところ、そこも墓地になつています。そこには、RとSを組み合わせた紋章、つまりロスチャイルド家の紋章が見えます。ロスチャイルドはユダヤ人です。全ての人の墓の最も低い所にユダヤ人の墓地があるわけです。御存知のように、昔のキリスト教の墓地には、ユダヤ人は埋葬してもらえませんでした。ペール・ラシェーズでは、埋葬してもらえるだけでもましです。プラハの町の真中には、小さなユダヤ人墓地があります。小さいといつても、この部屋ぐらいあります。これはゲットーの中にあつた墓地ですが、中世の天文学者ティコ・ブラーからフランツ・カフカに至るまでの墓が、全

てそこに入っています。ですから、墓石はまさに林立しています。この部屋にあるイスよりもっと狭い間隔で並んでいます。こういう風に見ますと、墓地を見ただけで、その町の歴史がなんとなく見えてきます。

向こうの墓地を見ていて、日本と違うことが、良くわかれます。どこが違うかと言うと、名前があり、生まれた年、死んだ年が書いてあります。普通はそれだけです。あたり前じゃないかとお考へかもしませんが、日本と比べていただきたいのです。日本の墓は、「之墓」という説明が入っています。「之墓」が書いてなければ、名前が必ず變つてしまして、「ナントカ居士・大姉」に變つています。つまり、脇に戒名が書いてあります。これではつきりわかるのは、ここにあるのは本人ではない。西洋では間違いなく本人がいる。墓の下に間違いなく本人がいます。それに対して日本の墓は要するにあの世であると、私には感じられます。

例えば子供が早くして死んだとします。そういうときに、西洋の墓では、カメオみたいな陶器に焼込んだ、顔の写真を墓石にはめたりする。これを見ると私は生臭くて嫌だなど感じます。それで気付いたのですが、自分の感覚では、墓をあの世として見てゐるのです。しかし、西洋人には、この世です。映画を観ていればわかりますが、この墓から、体を持つ人が生きかえってきます。それが吸血鬼であり、ゾンビで

あり、バタリアンです。日本では幽霊しか出できません。これは体がありませんから、透きとおっています。日本の幽霊は足がないことになっています。お気付きだと思いますが、幽霊というのは、普通に絵を描くと、ただの人間になってしまいます。多少顔色が悪い人だなとか、病あがりかなとは感じますが、それだけのことであって、いかに描いても、普通の人になってしまいます。ですから、足がない、透き透つているという、約束ごとをつけませんと、幽霊の絵は描けません。

こういう風に考えますと、私どもの文化は死というものを、ある切り方をしています。非常にきっちとここで、切っていることがあります。それは、こころの中にある仕切りだと、既に申し上げました。これが、文化とか伝統と言われるものであって、これをえろと言うと、たいていの方は怒る。そう簡単に変えられるかと言います。

それはなぜかと、そういうものは全体として一つのシステムを作っているのであります。システムは一部だけ変更するわけにはいきません。それは銀行などでも、おわかりとりますが。

私は昔から、ワープロを使っています。フロッピーディスクもしそつちゅう使います。これで原稿を書いて、出版社に出しますが、当時はワープロが百万円もしたという時代で

す。そうすると、とても読みやすい原稿ができます。当時の編集者の仕事は、書いた人の文字を判別するのが、五割ぐらいです。そこで、奇麗な原稿を出すのだから、本当は原稿料を高くしてくれてもいいのですが、そういうことはありません。フロッピーがあるからそのまま活字を拾わしたら、今度は活字を拾う不便もない。機械に拾わせたらいいじゃないかというと、出版社は、設備投資にお金がかかりますと答えます。これでわかると思いますが、現在でもまだ、勿論大学によつては、何か書くと、フロッピーを送つて下さいという。

これは馬鹿げた話で、あんなものはコンピューター同士を電話でつないで、送れるはずのものが、フロッピーというものにして送っている。これは、コンピューター同士を完全に継げた、ネットワークというシステムを完成していないので、システムの一部だけを便利にしてもだめだ、ということになります。同じように、生きた人と死んだ人をしっかりと区別する習慣というのは、その簡単に動かないだろうと、私は思つています。

なんでこんな話からはじめたかというと、今ふと思ひ出しましたが、今日そもそも何の話をするか、言つてなかつた気がします。それは、「心と体と社会」について話をしたいと思います。その中で、ここは仏教学部ですか、私との接点は、死んだ人を扱うということにあります。

私の場合は、病院とお寺の仲買いみたいなもので、だいたい日本で言う、抹香臭い仕事をずっとしています。献体を御希望の方が亡くなりますと、私の所に連絡がございます。ご本人は連絡できませんので、遺族の方が連絡をしてきます。「どこそこに何時きてください」と。一番多いのは、お葬式の後に、焼き場にゆく代わりに、私どもの所に来ていただきます。そして、一年ほどお預かりして、解剖がすんだ後に、火葬いたしまして、お骨にして、お返しします。お返しするときは、引き取りに来ていただけますか、それとも持つて伺いますか、または、年に一度十月に慰靈祭をしていますので、その場に来ていただけますか、ということを伺います。人によつては、来てください、といふので、持つて伺います。

これは、奇妙な職業として、生きている内にどういう縁があつたのか、わからない方を、亡くなつて、お預かりして、火葬までして、そのお骨を首に掛けて、故郷まで持つていつて差し上げます。そういう作業をしているときは、殆ど坊さんじやないかと考えています。これは、非常に気持ちのいい作業として、大変不思議な感じが致します。今申し上げたようく、袖振り合はうも他生の縁とよく言いますが、まさにそういう感じでして、今自分の膝の上に乗つてゐる人が、一体自分がどういう関係があるかを考えると、この世の常識では、

い日本で言う、抹香臭い仕事をずっとしています。献体を御希望の方方が亡になりますと、私の所に連絡がございます。ご本人は連絡できませんので、遺族の方が連絡をしてきます。「どこそこに何時きてください」と。一番多いのは、お葬式の後に、焼き場にゆく代わりに、私どもの所に来ていただきます。そして、一年ほどお預かりして、解剖がすんだ後に、火葬いたしまして、お骨にして、お返しします。お返しするときは、引き取りに来ていただけますか、それとも持つて伺いますか、または、年に一度十月に慰靈祭をしていますので、その場に来ていただけますか、といふことを伺います。

何の関係もないわけですが、どう言う縁があつて、今私の膝に乗つて、故郷に帰るのだろうと思うと、大変不思議です。これが、「御縁」という奴だな、という気がするのです。

よく申し上げるのですが、未だに私に印象に残つていることがあります。電話なのに品が良いか悪いか判るのか、とも思われます。まず電話をしますと、品のいいお婆さんが、出ました。電話なのに品が良いか悪いか判るのか、とも思われますが、だいたい口の聞き方で判ります。その方がお出になられて、「町田に来てから、また連絡ください。判りにくいで、孫を迎えて出します」とのことでした。そこで御遺骨を見ますと、男の名前なので、これは旦那さんだと思いました。風呂敷に入れ、赤門の外に出ました。外に踏み出して、しばらく三四歩歩くと、その途端に手に持つたお骨が、突然動き出しました。ブーンと揺れだしました。鳴り出したわけです。私、初めての経験で、ピタッと立ち止まつたのです。そこでもう考えたのは、このお骨、笑つてゐるのだろうか、泣いてゐるのだろうかでした。

それは、何度もお骨を届けているので、まずそれを説明しなくてはいけないのですが、一般に解剖になつて、お骨になつて帰られる方は、必ずしも家族に喜ばれている人とは限りません。特に田舎の方で、老人ホームで亡くなつた方は、良

く我々が扱うのですが、故郷を出てきて、長い間東京のような都会に行き、最後は老人ホームで亡くなるような人ですから、故郷の方と疎遠になるケースが多い。だから、そういう人を今度は田舎に電話をすると、まあ持ってきてくださいといいます。そのときに、死んでお骨になつたら引き取つてやるう、というニュアンスが感じられます。ですから青森でも福井でもお届けします。その時、お骨と一緒に旅行しながら、この人は、帰りたいのか、帰りたくないのか、考えることがありました。

それで、今お骨が動いた時に、笑っているか、泣いているのか、瞬間に思いました。非常にいい天気でした。ああこれは、笑っているなと感じました。それで、そのまま車に乗りまして、お届けしました。向こうに着きましたら、まさにお婆さんが出て来られまして、それで実は、という話になり大変歓待していただきました。

「これは、家の息子でございます。」と仰りました。実は、息子さんお一人で、後は娘さんなのですが、そのたつた一人の息子さんは、「生まれたときから身体障害が、ございまして、ずっとお国の世話になつていて。亡くなつてからでもお役に立つのであれば、喜んでということで、息子が死んだときに献体をさせていただいた。」と仰つてました。

その方は、おそらく一生ずっと母親にくつづいて生きてい

たと思いますが、それを私どもが一年間もお預かりしたので、成る程帰りたかった訳だ、お母さんのもとに、それで笑つたんだなど、私はその時思いました。

お骨というのは、みなさん、どうなつてているのかご存じかも知れませんが、私どもでは、桐の箱に入れまして、更にその中に骨壺が入っています。この骨壺は関東では大きく、関西では小さいものですから、うちの骨壺で関西にお届けするト、時々びっくりされることがあります。それは良いのですが、これは陶器として、蓋が問題なんです。グラグラするから、私どもは最終的に十文字に針金を掛けます。ところが、針金ですから一番底の所が、おそらく場合によつては尖つていることもあります。こうしますと何が出来るかというと、弥次郎兵衛のようなものが出来ます。そして、私がお骨を持って通りの外に出ると、大型トラックなんかが通ります。すると、ご存じかも知れませんが、物体というものは共振というのを起こします。固有振動数を持つてまして、自分の持つている固有振動数と同じ振動が、外から伝わって来ますと、共鳴を始めます。これは小学校の時に、音叉を二つ並べて、片方を鳴らすと、もう片方が弄つてもないのに鳴り出す、こういう実験をご覧になつた方はおわかりだと思います。あるいは、『フーコーの振り子』ではなく、「ホイヘンスの振り子』というのがあります。部屋の両側の壁に、振り子時計を二つ

かけておきます。はじめは、両方バラバラに動いています

が、長い時間が立ちますと、不思議なことに両方が完全に、同じ動きをします。これも、一種の共鳴ですが、この場合にもこれが起ったのだと思います。たまたま通つた、トラックが作り出した振動が、私の体、ないし空気を伝わって、お骨がブーンと揺れだしました。物理的な説明ですが、初めにしたほうは、心理的な説明です。でも、説明としては、どちらでも差し支え無いわけです。

そういう仕事を、長年やっています。そこで、色んなことを考えるようになりました。先ほど言いました、生きている私がいて、脳死の人がいて、間違いなく死んでいる人がいるとします。この違いが何か、ということが段々判ってきた気がします。

まず、完全に死んでいる死体です。このことについても、誤解の無いように言つておきますが、死体というのは皆さん方は、しばしば客観的な物だとか、人にとっては物だと仰る。はつきり申しありますが、私は四十年近く、死体を扱つてきましたが、物に見えたことは一度もございません。絶対に物に見えません。では、何に見えるかというと、「人間」に見えます。当たり前です。だから、死体を「物でしよう」と仰る方には、「あんた死体見たこと無いね」と申し上げます。だいたいこれが、ただの物ならば、われわれの方が反応

しないはずです。

二番目に、死体は一種類では無い、ということも申し上げておきます。どうして一種類じゃないと言いますと、今、物と言いました。人間は死んだら、死体になつて物になります。では、実証的に、客観的に死体を見つめると主張されるのであれば、「ちょっとあんた自分の死体を見てご覧なさい」とこう申し上げたい。自分の死体は、実証的に見ることが出来ない典型であります。見えている間は、生きているのでありますて、死んでからは、見えておりませんので、これははどうしようもない。実証的・経験的には、存在しないものが自分の死体であります。それから、皆さんが死体は物だよ、と言うのは、赤の他人の死体であります。今、お回している脳は、実はドイツ人の脳です。生きている間は、皆さんは縁もゆかりも無い方だと思います。そういう意味で、「ただの物じやないかよ」と思つてご覧になつているかもしれませんが、実は人でありますて、生きているときは、皆さん方と同じ人であります。そういう意味で考えると、少し変な気がするかも知れませんが、そういう関係を抜きにして考えますと、赤の他人の死体は、確かに物のように見えますし、死体と言えます。

次に、ごく親しい人の死体です。親・子供・兄弟・恋人・

夫婦、これらの人々の死体は、どちらにもなり得ますが、基本的には死体ではありません。それは、そういう死体を見たときに生きている側が、取る行動を見れば直ぐに判ります。皆さんのが外に出て、通りで誰かが倒れていて死んでいるように見える。腸も出ているし脳も出ている。力が抜けていて、真っ白になっています。ただし、顔だけがこっちを向いていまして、それが自分の子供であつたらどうするのか。誰だつて、そばに寄つて行つて抱き上げるなり、声を懸けるなりします。親しい人であれば、必ずそうします。子供に限りません。ということは、どういうことか。つまりそれが、全然知らない人であれば、「ああ変な物が見た、嫌なものを見た」と直ぐに逃げていきますから、すると同じ死体に対して行動が、百八十度違いますので、これは違う存在と考えるべきです。

ですから、こういう風に整理しますと、死体は人称変化する事になります。最初に申し上げた自分の死体は、落語の中にしかありません。一人称の死体です。粗忽ものが、「浅草の観音様の前で、おまえ死んでるよ」と言われて、すつ飛んで見に行く。すると、無精髭を生やしたみすぼらしい中年男が死んでおりまして、「ああ、確かに俺が死んでいる」と納得するのですが、「あそこに死んでいるのが俺だとすると、ここに立っているこの俺は誰だ」というのがこの落語の落ち

です。これは、一人称の死体は無いということです。

二人称は、いま申し上げた、これは死体では無い。どこまでいっても死んでいない。これが、一番極端な例になりますと、生前生死を共にした仲、即ち戦友の死体がそうです。戦友の死体・遺体を未だに拾いに行こうとする人がいるのは、私は良く判ります。つまり、第一に形が残つて いる限りは、二人称の死体は死んでないと。ですから、皆さんのがニューギニアの奥地に行かれて、現地のお宅を訪問します。大家族で、長屋に住んでいますが。大家族を紹介してもらつた後で、主人が梯子を登つて、屋根裏に上がりまして、何かを持って降りてきます。持つて降りてくるのは、頭の骨として、それを机の上に置いて、「これが家の祖父さんです」と。それでもいっこうに不思議はないのです。戦友の遺骨を拾うのと同じで、形が残つて いる限り、ある意味ではその人は、生きていますから。従つて、二人称の死体というのは、生きています。生きているときの人間関係が、そのまま死体に関しても延長しているのです。

三人称は、これはお分かりのように、皆さんのが方いわゆる死体とおっしゃるのは、三人称の死体です。生前の人間関係が無かつた人のもの。これが、ただの死体でございます。そういう考え方ますと、私どもがしている仕事は、極めて客観的な、或いは科学的なものと考へるひともいますが、それは誤

解でありまして、そうはいかないのです。私が担当してました。

た。解剖学第二講座の先代の教授でした藤田恒太郎先生とい

う方が、献体の団体を始めたのです。この方は自分が始めた

だけあって、亡くなった時には、必ず学生の実習に出すよう

にと、きつい遺言でございました。この方大変几帳面なかた

で、六十歳の三月三十一日に、定年でございまして、四月一

日にはお亡くなりになりました。そうしたら、もうそれを実

習にお出しして、はじめはちゃんと実習していたのですが、

そのうち段々教室員が嫌だと言い出しまして、本当は実習

は、二ヶ月が三ヶ月続くのですが、最初の一週間かそこら終

わった所で、やはり藤田先生の遺体は、引っ込めようという

話になりました。途中まで解剖は進行したのですが。これ

は、つまり二人称の死体です。好きな人でも、嫌いな人でも

ともかくそういうこと関係無しに、形が残っている限りは生

前の関係が延長しますので、死体は決して物ではありません

ん。それを物だというのは、強いてそう仰っているのだと、

申し上げているのです。そして、その人の立場によつて、違

つて見えてくるのです。そういう時に、物だからという客観

性を、無理に持ち込まないほうが、宣しいわけです。さつき
申し上げたように、死体がなぜ気持ち悪いのはなぜかといえ
ば、やっぱり人として見ているからであります。これは、人
でもなく物でもないと、読めないから、気持ち悪いので

す。人と思えば何でもないんです。この人口利かないな、動
かないな、触ると冷たいなど、そういう患者さんは沢山いま
す。

ですから、私は、良く申し上げているのですが、日本に非
常に強いゲットーがある。ゲットーというのは、ユダヤ人を
収容していた所ですが、現在の日本にある一番大きなゲット
ーは、死者に対するゲットーです。死んだ人を訪問して、帰
つてくると塩を呉れると言いましたが、それくらいはつきり
と、垣根を作つて、おまえらはそこに居るというのが、死ん
だ人なのです。幸い死んだ人は、一切文句を言いませんの
で、それで通つていますが、差別というなら、これくらい激
しい差別ない。昨日と今日では、掌を返すようになつてい
る。皆さん大事にしているから良いんだと、告別式ではお考
えでしようが、そんなら土左衛門が上がつたら、自分で素手
で持ち上げるかというと、まず殆どの方が、触ろうとなさら
ない。私どもはそういう仕事をしていましたから、何ら気に
なりませんからはつきり申し上げます。そういう風な感覺
を、日本で持ちますと今度は、あいつはおかしいとなりま
す。

今の感性は、江戸時代に作られた感性だと私は考えており
ます。死者が穢れた物であつて、そういう物に触れた人間で
あり、だから穢多というのが体制的に、江戸では差別されま

す。つまり社会を構成するとされる、士農工商の枠から外に出されてしまします。それは、よく考えていただきたいことの一つで、未だにその差別を温存している方が、非常に偉い人から始まって、沢山ございます。それは、幾らでも例を挙げることが、出来るのです。差別問題を言うのなら、まずそれを言つてもらいたいと、私は思います。

例えば、私どもは解剖をやっています。だから、解剖のようなことをするから、医者が感性が変わつて、臓器移植のような残酷なことを、平氣で出来るようになると、言うようなことを本に書いている人がいます。これは私から言わせると、江戸時代に成立した偏見の上に、安住している考え方です。

例えば、ご存じと思いますが、江戸末期の神道の平田篤胤が書いたものを読みますと、だいたい儒者というのは、坊さんを嫌つたり、馬鹿にしておりますから、坊さんというのは死んだ人間のように穢れた人間を扱つた手で、そのまま様々なことをすると、書いています。平田篤胤の頭の中には、はつきり無い物がありまして、それは、人が亡くなつた時には死体が残つて、その死体を誰かが片づけなくてはならない、ということがスッポリ落ちています。それを片づけるのは自分でない、というのが非常にはつきりとそこに出ています。

中世の人は、そういう物をどういう風に見ていたかというのを、スライドでお見せしたいと思います。これは、「九相詩絵巻」でございます。かつては中世、つまり鎌倉時代から戦国時代にかけて、特に鎌倉時代には沢山描かれて、普通にお寺に掛かっていたと言われています。私はあまり見たことが無かつたので、是非若い方には見て載きたい。ごく普通にあつたものです。良く「九相詩」と書きますが、これは、宋の蘇東坡という詩人の詩から採つてあるわけです。そして、これを絵巻にした物です。これを「九つの想い」と書く場合がありますが、その時は「九想図」と書きます。

これが最初の姿として、若い女性が生きています。これが、死にます。死にますと、畳の上に寝かしてあって、着物が掛けであります。当時もこれを見て想像つくのは、湯灌をやつてているのでしょうか。つまり、亡くなつた方の体を洗つてあげて、その時に着物を脱がせますので、皆さん方やつたことはないでしようが、固くなつてゐるから、脱がせるのも着せれるのも大変です。洗つた後で着せるのは大変でして、もう着せないで上に掛けでやります。

次に、これがしばらく経ちますと、お腹が膨らんてきて、色も変わって黒づんでまいります。このお腹が膨らんでくるところが、良くお分かりだと思いますが、これは我々のお腹の中に大腸菌とか乳酸菌とかが、住んでおりまして、それが

ガスを発生致しますが、生きているとそれを肛門が機能します。皆さん方も良くお分かりと思いますが、肛門というものは鈍いようで、非常に敏感な所でございまして、ちゃんと固体・液体と气体を区別します。だから、气体を出すつもりで固体を出してしまった、ということは普通は無いわけですが、そういうことをちゃんと知っています。ところが、それがもう出来ませんので、お腹が膨らんできまして、夏なんかですと、破裂してしまいます。ここに来る前に話をしていたのですが、ここでもう一つ話をしておきたいのは、よく「人は一人で生まれて、一人で死ぬ」と言いまして、人間社会ではその通りなんですが、これを生物の世界に持ち込みますと、実は皆さん方は、一人で生まれて、一人で死んでいるわけではありません。今申し上げたように、乳酸菌・大腸菌その他、様々な微生物がお腹の中に住んでいまして、さらにこの頃でしたら、今でもそうかも知れませんが、回虫とか^{タヌシ}蟻^{ギョウ}虫とか十二指腸虫とかの虫がいまして、或いは、ひぜん・疥癬^{カイゼン}・水虫の類を含めると、一億位の生き物が住んでいます。生态系でございます。现代の日本では、こういう方を火葬しますから、常に一億玉碎だと、私は申し上げています。一人で死ぬなんて、とんでもない。

更に次ぎ、ここまでできますと、いきなり見ますとなんだかよく判らない。そばに行くと、はつと気がついて、ぎやつと言ふ。これは人だつていうんで、逃げ出す。そういう風な姿になります。

次は、これは死に方や季節にも寄りますが、冬に飢え死にします。急速にミイラ化致します。こういう姿に変わります。

次は、これは、白骨相と言つてますが、白い骨に変わつて
います。そしてまだ、韌帶・軟骨等が残つていまして、繫が
つた姿として、標本にする場合、交連骨格と言つてますが、
それが自然の姿で出てまいります。これはお気づきにならな
いと思いますが、驚くべきことです。どこが驚くべきかとい
うと、この時代に人間の自然の姿を、こういう目で書いた絵
というのを、私は、日本以外のものを見たことがありません
よ。よその世界で描かれる絵は、もつと稚拙な絵でございま
して、絵が下手だと言うだけでなく、こういうものをここま
で、事実をありのままに見るというか、事実を素直に見ると
いうか、そういう目が、大変特殊な目だということが、わか
ります。私はこの絵を見たときに、いわば驚嘆したわけでし
て、日本にこんな絵があつたことを知らなかつた。解剖の絵
というのは、我々は良く知つて慣れていますから。

次は、これが、最後の姿として、この白骨が、バラバラになつたときに、人間死んでいる。これは、間違いなく死んでいるといつて良いと思います。これで、色んな意味がこの絵の中に、含まれ得ることがお分かりだと思います。つまり、人は一瞬にして死ぬものではない、という風に見ることもできます。死ぬためには、九つの姿を経なければならない。で我々は、それが嫌ですから、死んだら大急ぎで火葬してしまふ。「こんなもの見たくねえ」と仰るわけです。見たくない何も、今皆さん方が死んで、外に放りだしておけば、同じような姿が、ずっと出てまいります。

ですから私は、学生と時々論争をしたときに、「親があるか」と聞いて、「ある」と答えると、「じゃあ今度、親が死んだら」と庭に出しておけ」といいます。これをご覧になれば、これが人の死の姿だというのが判ります。中世の人は、それを知っていた人たちです。このことがなぜ大事かというと、国語とか文学で、『方丈記』『平家物語』等を教わりますが、私はこういう絵を見るようになってから、『平家物語』の最初の、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」というのが、やっと成る程という気がしてまいりました。江戸になりますとどうなるかといえば、「鐘ひとつ 売れぬ日は無し江戸の春」になります。「花の春鐘は上野か浅草か」ですから、とても諸行無常どころではないことが、よく判るので

す。同じように、『方丈記』の鴨長明の目というのは、実はこういう目でござります。ですから、鴨長明は、この短い『方丈記』の中で、都が死体のにおいで臭いと書いた。そして仁和寺の隆曉法印という偉いお坊さんが、死体を成仏させるために、額に「阿」の字を書いた。その数、左の京だけで四万二千三百と、淡淡と記しています。その隆曉法印が、おでこに「阿」の字を書いて行った人々は、今お見せしたような段階が全て含まれていたはずであります。そういうようなものを、見ていた人たちの中から出てきたのが、鎌倉仏教であると思います。

この間、私は佐渡に行つて来ました。佐渡の国中平野の真ん中に、日蓮宗のお寺がございまして、「この辺にはあまりだらづつと庭に出しておけ」といいます。これをご覧になれば、それは、お寺の縁起をみれば判りますが、日蓮が流されたときに、まずそこにあばら屋があつて、そこに座つて法論を戦わしたとあります。さらに、そこは塙原と言うところとして、塙原と言う名前を聞けば、我々の商売では直ぐにわかるのですが、実はそこは国中平野の人々が、死体を捨てた所です。五来重さんはそういうますが、日本は風葬の国ですから、この習慣がおそらくまだあって、そういうところに捨てていたのだと。

そういうものを見ていた人たち、こういう目を持つていた

人たちですが、今ではその背景がすっかり失われているような気がします。『方丈記』を読ませたって、どうせ皆さん大して、お読みにならないとおもいますが、挿し絵にこういうのを入れたら、少しは目が覚めて、読むんじやないかという気がします。そうすると、逆に初めて判った、あれが何をかいているのか、五感から判つて参ります。

次は、参考のために、十四世紀のヨーロッパで、どんな骨の絵を描いていたかを、お見せします。こんな絵を描いています。幼稚園の園児が、描いたんじゃないか。これは、アラブの医学書の写しであります。写すとだいたい歪んじやうんですけど。その歪みが極端になると、こんな絵を描いています。まともになつてくるのは西暦一五〇〇年頃からでして、これは、ちょうどレオナルドが、活躍した時代です。日本で言えば、室町でございますか。その頃になりますと、やつとまともに骨に見える絵が、描けるようになります。私が言いたいのは、絵の上手い下手ではない。物事をどういう風に見るかという、その目であります。先ほどの絵で、それが判ると思ひます。

次は、今のような絵を一枚に納めた、六道絵です。これは、今のような絵が、たくさんあつたことを知つて戴きたいから、お見せしたのです。

次は、これも「九相詩」の一部ですが、これになると、も

はや先ほどの絵に比べて、写生そのものであることが、お分かりいただけます。助骨や腸がはつきりと出ておりまし、それを野犬が食い荒らし、カラスが突つついています。ですから、こういう絵を見ますと、日本でなぜ犬畜生といふ言葉があつたか、判ります。主人が生きている間は餌を貰い、主人が死ぬとこういう風になることを表しています。

次は、これはカメラマンの藤原新也さんのインドのベナレスの写真ですが、ここには今の姿が、全く表れてまして、野犬がいて、死人がいて、右下にカラスがいます。ですから、先ほどのような風景を見たければ、インドにいけば、今でも同じような風景が見られます。それを、野蛮とみるかなんど見るかは、皆さんの勝手ですが、少なくとも、私どもの中世の風景には、こういう物がごく普通に見られていました。基本的に鎌倉仏教というのは、そういう風景を、寧ろ背景に生まれてきました。

次は、江戸になると、骨を描く場合、このように描くようになります。右側が北斎の好きな蛸のイメージです。なにが言いたいかというと、江戸では、骸骨を描けば、それは化け物だという約束事になつています。つまり、骨というのは、化け物という文脈の中でのみ、描かれるということです。鎌倉時代の後は、骨を骨そのものとして、人の素直な姿として、描くことがなくなります。これを私は、脳が化ける、

「脳化」と呼びますが、人間の体が、脳の中にあるものに変わつてきます。

次の絵もそうですが、これは物の見事に骨を描いてまして、正確な骨であります。しかし、絵を見ればすぐお分かりですが、これも化け物という文脈の中で描かれております。

それに対して、江戸時代では、解剖学が出来ております。多くの方は、オランダ由来の西洋の学問だと言う風にお考えですが実は違います。これは、漢方医が自前で始めたことでございます。一番お考えいただきたいのは、古い歴史の書き方ですと、必ず偉人がいて、それが世の中を引っ張るんだ、という考え方を致します。ですから、杉田玄白『解体新書』となりますが、それは私は誤りだと思います。日本で最初に解剖をしたのは、杉田玄白が骨が原の解剖を見に行く十七年前、京都の山脇東洋でございます。宝暦四年・一七五四年に、山脇東洋が、京都所司代の許可を得て、最初に官許の解剖を、京都の六角刑場で致します。それが、日本の解剖の始まりです。

じやあなぜそういう解剖が始まつたかというのは、私の長年の疑問でしたが、今では、どうやら話が分かつてきましたような気がします。それは、江戸という時代は、中世のあいうものを乱世の原因として、徹底的に潰した時代であります。ちょうど戦後が戦前を軍国主義である、明治が江戸は封

建時代である、といつて前の時代の意識を、ちょうど逆さまにひっくり返したように、江戸時代は、乱世をひっくり返しまして、徹底的に平和を志向した時代ですから、そこでは死体のような人間の自然というのは、抑圧されてまいります。

ご存じのように、江戸の絵をみると人間の肉体が、例えば鎌倉時代の運慶・快慶、或いは九相詩のような、それが一切なくなつた時代として、歌舞伎の役者絵を、ご覧ください。人体に関して、非常に様式化されていることが判ります。見返り美人もその典型です。そういうものが江戸であります。

その中で、自然の身体を見なくなつて一番困つた人は、誰かと言ひますと、医者であります。医者が体のことを知らなければ、医者が出来ません。そういう時代が百年続きます。それで何が起こつてくるかというと、一般の方々の中に、人体の自然という伝統が元々あるところから、知識を得たいという需要が広がってきます。その需要から解剖が発生した。たとえば当時の医者は何をしていたかというと、身分の高い方の脈をとるときに、糸脈ということをする。それは、手首に糸を巻いて、そのはじを医者が握ります。直接触るのは、畏れ多いことです。そんなことで、体なんか判るわけない。

そういう風な所までいった時代ですから、そこにはじめて、良心的な医者の間では、人体のことを知らなければ、医

者なんか出来るか、という考え方が出来てきます。それと同時に、抑圧された所から、そういう知識に対する需要が増えてきます。そこで、江戸の漢方医の中から、解剖が始まりまして、一旦始まりますと、様々な知識が要求されて、そこに現れてくるが、杉田玄白であります。つまり、西洋の解剖学が日本に比べて、遙かに進んでいることを発見しまして、そこで初めてオランダ語の本を翻訳するのが、『解体新書』であります。

それが、明治以降有名になりましたのは、明治以降の学者は、まさに杉田玄白のやったことをやつたからでして、山脇東洋のやつしたことからではありません。つまり、横の物を縦にするというのが、明治以降の学者の、非常に重要な作業になりましたので、『蘭学事始』をこの世にだしたのは、じつは福沢諭吉であります。神田の古本屋から発見された、一冊の本ですが、それを推薦して、これだけ有名にしたのは福沢諭吉です。福沢諭吉の生きてきた生き方を考えていただければ、よくお分かりになると思います。人のことは思えなかつたと言うだけのこと。

江戸には従つて、解剖学の中には、ある意味で中世が復活しているのであります。これは、大阪の医師の南小柿寧一が作った『解剖存身図』という、彩色の解剖図であります。色付きの解剖図としては、当時世界でも冠たる解剖図の一つ

ですが、見事な迫真的な絵であります。

これにも九相詩以来の伝統があると、何となくわかるのであります。そこで、内蔵の色に興味を持ちまして、一つの死体について一つの内蔵を見るという原則を立てました。ですから、四十体以上の死体に立ち会つてることは、間違ひ有りません。と言うことは、江戸では如何に解剖が盛んであつたか、判ります。

これは单眼症の子どもです。江戸で隠されたのは、こういつた自然の人間です。ご存じのように、先ほど骨が化け物として、描かれると言いましたが、全く同じようにこういうものが、化け物としてのみ描かれるようになります。これが、一つ目小僧であります。こういう子どもが生まれますと、多くの人がそれを川に流すか、どうかしたと思ひます。それを見た人たちが、一つ目小僧として描くことになります。

次は、これはシャム双生児といって、ヨーロッパでもどこでもあるものですが、最近ではベトナムから、こういう子が来たので、お分かりと思ひますが、ジャーナリストがこれを取り上げますけど、ベトナムの枯れ葉作戦で、発生したという文脈に関連させて、語るのであります。絶対にこの時でない質問は、日本にこういう子が生まれませんか、生まれたらとしたら、生きてますか、死んでますか、という質問です。これは、絶対に出ません。タブーでござります。

カナダ出身の脳神経外科医のペンフィールドが、人間の脳の中に、これは知覚系ですが、割り当てられている脳の部分の大きさに比例して、人間の体を描くとこうなりますよという図です。つまり、脳の中では、舌が顔くらい大きいと言うことです。手でいいますと、親指の感覚が非常に大きくて、小指は案外大きくて、中指より大きい。首や舌がちよんぎれて描いてあるのは、おかしい、とお考えになる方もいるかも知れませんが、実は脳の中では、こういう風に体の場所を配列しています。千切れで配列しているのです。これは非常に奇妙な状況で、まだ充分意味は分かつてませんけども、皆さん方の体は、脳の中に、こういう風に割付けられています。

これは、見ると何となく思い当たる方もいるんじゃないでしょうか。舌が非常に大きい。だから二枚に割つて使っている人もいます。それから、唇も鋭敏でございまして、そういうことが判ります。

次は、江戸で描かれた、有名なポルノグラフィです。これは、ペニスをこれだけ大きく描く。ですから外人が、「ウタマロ」といつてよく笑うわけですが、日本人はこれだけ大きいのかって。これは、何を意味するのかというと、実は骨の化け物と同じで、私は性行為のとき、人間の頭の中にある、生殖器の大きさというのは、もっと大きく描いて良いくらいだと、こう申し上げたい。つまり、これは頭の中にある人体

でして、そういう風な変形が施されているのが、江戸の絵画の特徴であります。こういう所ですらそうである、と申し上げたい。私は、実はペンフィールドは、江戸の枕絵を見て、思いついたんじゃないかと、そう思っています。

中世の絵を見ますと、私どもの感性が大変変わってきたことが、判ると思います。中世の人にとっては、死者は日常的な存在でしたが、私どもにとつては異常な存在です。そうすると、一体何が変わったのかというと、今日は、それを全部お話している暇はありませんが、私は基本的に、中世風の考え方・感じ方を、非常に強く抑圧したのが、江戸であると考えています。それを「脳化」と呼んでおります。脳が化けた。特に、現代社会ではその中でも、ある強い原理が指導的になっています。それを難しく書けば、予測と統御と言います。物事がどうなるか予測して、それに対して一番有効な手を打つという風な考え方です。

こういう風にずっと言つてきてましたが、これだと皆さんがボカンとして、あの人はまた難しいことを言つているといわれるので、ですからもう少し易しい大和言葉で説明しますと、最近は「ああすれば、こうなる」と申し上げています。で、「こうすれば、ああなる」と。皆さん方は、「ああすれば、こうなる。こうすれば、ああなる」で生きているんであって、これは日常生活していると、嫌というほどわかるんです。

私は、大学におりましたから、大学で書かされる書類というものは、おおかたそのような書類でありまして、一番典型的なのは、科学研究費の申請書類という奴です。これを毎年一回、もうこの時期は書き終わっていますが、あれを見ると、最初に目的とあって何をするかつてことです。次に、その方法。そして、結果みたいのを予測しなくては、いけません。

それをやりますと、どうなるか判りませんと書くとペケです。こうこうになるであろうと書きます。そして、その結果がどのように役に立つかと、いうことまでかつては書かされました。

笑われてますけど、実験をするのに、これこれこうだと書いて、そんなこと判るくらいだつたら、実験なんてやらないです。もうつまらないからやらない。おもしろくもおかしくもないわけであつて、そういうもの書かがあるので、教授になつた時から、書くのをやめてしましました。やめちやうとお金こないので、やめちやいました。やめて、皆さんに申し上げているのですが、「ああいうものを書くな。ああいうものを書くと、嘘をつく癖がつく」。

しかし、「ああすれば、こうなる」でやるしかないのと、例えば、お母さん方は、子供を持ちますと、あの幼稚園にいれて、この小学校にいれて、だいたいこんな中学・高校にいれて、こんな大学にいれてと、まさに「ああすれば、こうな

る」です。会社行つたら、企画書をかいて、これこれこういう風にしたいと、だいたいそれには、こんな原料を使い、こういう物を作り上げると、こうやってこういうところで売る。そして、だいたい幾ら儲かるはずだと、こう言います。結果どうなるか判りませんといつたら、必ず出直して来いとどなれます。

そうすると、皆さん「ああすれば、こうなる」ということ以外、出来ないということになる。じゃあ、「ああすれば、こうなる」というのは何かとなると、客観的にいえば、合目的的行動というのになりまして、ある目的に到達するためには、一番省エネの行動は何か、効果的なのは何か、と考えることです。「ああすれば、こうなる」と考える人は、自分がやつたことが、その通り行けば、その結果が合目的的行動になつているとは、気づいていませんが、じつは外から見れば、合目的的行動なのです。

じゃあ、合目的な行動を一番安く効率的にやつている動物は何か、これはあらゆる動物がそうとして、だから生き延びています。例えば、昆虫ですが、昆虫は実際に見事なことを致します。例えば、ファーブルの『昆虫記』をお読みになつた方は、わかると思います。私は、この間の春に暇でしたので、クローバーの咲いている所に座り込んで、カマキリのやつていることをただ見ていました。これが、大変おもしろいのです。花

にやつてくる蜂を捕まえておりました。ぱつ、と蜜蜂が捕まります。カマキリが、どこをどう捕まえるのかと思つて見ていますと、この二カ所を捕まえます。蜜蜂は刺そうとしますが、カマキリに対して、九十度横を向いてるので、刺せません。噛みつこうとしても、噛みつくわけにもいきません。そして、カマキリが何をするか見てますと、ここにカマキリの頭がありまして、目の前に蜜蜂のお腹がある。そこをかじつてました。これをかじりおわると、ぽい、と捨てます。周りを見回したら、二三四、お腹に穴のあいた蜂が、捨てられてました。私は、いたく感激致しました。なぜかと言いますと、ここは蜜の袋として、これは甘党のカマキリです。どうして、こう旨いことを知つていいのかな。計算してやつたら大変です。こういうロボット造つて、花にきている蜜蜂を捕らして、ちょうどどここん所から蜜を吸い取れという機械、そんな物は出来ない。一番大事なのは、合目的的行動、いわゆる本能という奴ですが、カマキリは考えてやつてしません。「どうやって蜜蜂を捕まえたら、刺されないで噛みつかれないで、一番旨いところが楽に食えるか」カマキリは、一切そういう計算をやつてしません。人間は、一生懸命に効率的に上手くいか考へて、ノイローゼになつたり、胃潰瘍になつたり、毎日暮らしてますが、私はこういうのを見ると、よくどつちが偉いかと考えるわけです。

まさに経済はそうですが、日本は経済を徹底的に効率よくやつていく。それは、結構で良いことですが、問題はそうやって効率的にお金を儲けて、便利な物を沢山作りだして、皆さんに余裕が出来る。経済が一切考へてないことがあります。それは、そうやって貯まつた金と暇を、何に使うかということです。それを一切考へていなかから、おかしくなるんです。

いまでは合目的行動が徹底的に追及される。これは、遺伝子が元々、持つている性質であります。脳のないアーメーバですら、食い物の方に寄つていって、危ない物から逃げます。これは、自然選択説をご存じの方は判ると思います。生物にランダムの変異が生じて、それがある特定の環境の中を長く間生きておりますと、いつの間にか適応的な行動が成立してしまう。心理学では、迷路学習というのがあります。ネズミを迷路の入り口におき、迷路の終点に餌がある。すると、ネズミは早く餌の所に行きたいから、苦労して最後に餌にたどり着く。いつも餌と迷路と放すところを同じにしておくと、何回かやつてある内に、段々上手くなりまして、最後には一直線に餌の所に行つてしまします。それと同じことが、進化の過程で遺伝子に起つてきまして、今のカマキリのように合理的な行動をするようになります。

私どもは、非常に大きな脳を持っていますが、その脳の中

に実は、遺伝子の持つていてるそういう合目的的な行動に対する性質が、そのまま埋め込まれていることが、現代の人間を見るとよくわかります。人間は昆虫に比べたら、色んなことを考えるから偉いはずだったのが、論理的に考えられるようになりますと、その最終的な結果は、いつの間にか、昆虫にそつくりなつてくるこのおもしろさが、何とも言えないのあります。そこで、そんなことを考えながら病気になつている人は、それこそ何ともいえないのであります。

それで、こうした中世の話をして、少しはああいう風に考えたらどうでしようかと。どういうことかといいますと、「ああすればこうなる」ということは、九相詩みたいのを見ていれば、わかるんです。つまり、あの姿は我々の世界から、隠されていますけど、あれを日常的に見いると、どうお考えになるか、今の方は怖くてお考えになりません。私が人体の展示をしたときに、前もって東大でしたわけですが、学生の若い女の子が来て何ていうか。

「先生、こういう物を一般に見せて、悪いことが起きるんじゃないですか」

「悪いことってどういうこと」

「例えば殺人が増えるとか」と学生がいいます。

「あんた、私が殺人傾向が強いって、告発しているんだよ」と申し上げたんですけども。だいたいそういう風な、偏見が

かなりございます。それで、九相詩を見ていると、どんな考え方になるかというと、確かに私は、「俺もいつかは、あるなるな」とおもいます。

こういうものは、ある意味で非常に大切です。なぜかというと、私は三月に東大を辞めました。これは、三年早く定年前で辞めたんですが、喧嘩して辞めたわけではありません。三月にみんなさん方定年になられるので、私も三年早く仲間に入れて下さいというつもりで辞めました。そして、去年の九月の教授会で、辞めさせていただきたいと申し上げたんです。すると、快く了承していただいたので、無事に辞めておりますが、ただ、その教授会が終わつたあとで、同僚の先生がいらして、「四月から何をなさいますか」と質問されました。私は、「その件でしたら、私は学生も含めて三十九年東大におりましたので、辞めた後は自分でどういう気分になるか判りません。これは、癌の告知と同じです。皆さん、癌の告知といういろいろ議論をなさいますが、こればかりは、自分で癌だと言われてみるまでは、どういう気分になるか判らない物ですから、あらかじめ考えても無駄なんであつて、辞めてあとのことは辞めてから考えます」と、素直にそう申し上げました。そうしたらその方が、「良く不安になりました」と仰つた。考えないで口が回つちやつたんですねが、「それなら、先生もいつか何かの病気でお亡くなりにな

るはずですが、いつ何の病気でお亡くなりになるか、教えて下さい」といいました。「そんなこと判るわけないでしょ」と仰るから、「それで良く不安になりませんな」と申し上げた。

そこに非常にはつきり出ているのが、「ああすればこうなる」の世界と、それとは全く違うもう一つの世界。それがさつきからお見せしている、四苦八苦の四苦の世界として、中世の人には当たり前の世界だったんですね。人間、理由がわからぬけど生まれて、生きて、年をとつて、病気になつて、死んで行く。これは、もう一方に必ずあるんです。こつちでは、お金とか地位とか権力とかゴチャゴチャやつている。それはそれで結構ですが、たまにはこつちも考えなさいよと。私は、中世の仏教の役割は、これでなかつたかと考えています。

ですから、一休は「正月や 真土の旅の一里塚」。正月になつて、皆さんお祝いしていると、杖のてっぺんにしやれこうべをのつけて歩いた。たまにはこちらを考えなさいよと。この年になつて、私の若い方への唯一の忠告は、せいぜいつしか思いつきません。「人間の作った物は信用するな」と言うことです。

人間の作った、伝統・文化・社会・殆ど全ての物がそうです。例えば、さつき言つた虫・植物・死ぬこと・体、これは

頭で作つたものではありません。女子学生だったら、その内子供を持つ。次に生まれてくるのは、ゴリラの子供だなんて思う人はいないわけです。やはり人の子が生まれてくるだろうと思っているわけです。それは自然にたいする、つまり人の作らなかつたものに対する信頼です。今的人は、人の作らなかつたものに対する信頼が、殆どゼロだということが、私は体験的によく知っています。人間の作ったものでなければ信用しない。ですから、郵便局に行って、現金封筒を受け取るときに、顔を知っているからといって、「俺だ俺だ」といつでも駄目なんであつて、パスポートや健康保険証を持つてこいというわけです。つまり、紙切れしか信用していない。

しかし、私は同じ人間であつても意識じやない、自然の部分だけを、三十年以上見てまいりましたから、そういうところを見ておけばある意味、人間を信用できるのです。

親鸞じやないけれど、如何に皆さんが何をしたところで、人間の遺伝子が決めた範囲の外には、出られないはずです。或いは、如何に考えた所で、千五百グラム程度の脳味噌からはでられない。それは間違いないことで、どうせ信用するなら、小さな脳味噌がさらに作りだしたほんの一部のものよりは、脳味噌そのものを信用した方がましですよと。随分乱暴な言い方ですが。